

論文審査の結果の要旨

氏名： 山 下 洪 文

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：よみがえる荒地-戦後詩・歴史の彼方・美の終局-

審査委員：(主査) 教授 上 田 薫

(副査) 教授 清 水 正 講師 中 村 文 昭

戦後詩は荒地派から始まる。戦前詩壇に名を馳せていた高村光太郎や三好達治は、戦時中戦争賛美の詩を書き、また小野十三郎や金子光晴は戦時中に抵抗詩を書いた。彼らは何れも明治生まれの詩人であり、戦時体制下における思想とは別の価値観から戦争を受け入れ、或いは戦争を批判した。しかし、大正時代末生まれの荒地派詩人たちは、戦時体制下の国家思想によって育てられ、戦争とともに成長し、戦争を潜り抜けた世代であった。従って、荒地派の詩人たちは戦争という現在・過去と、賛否という二項対立的立場によって対峙しえない存在であり、戦争は彼らの心のうち深くに根を降ろしていた。

山下氏の論考では、この荒地派の同人、鮎川信夫・北村太郎・木原孝一・黒田三郎・田村隆一・中桐雅夫・三好豊一郎・吉本隆明の八人の詩人について、それぞれの詩人の全詩を対象として、彼らの戦争体験を解説し、戦後詩の出発点の意義の解明に取り組んでいる。山下氏の論文は次の三つの研究方法によって展開される。①荒地派の戦争体験を研究し、それが詩的感性にどう影響したかを探る。②詩人の生涯を辿り、その変遷を再現する。③荒地派の言語を解剖し、その詩意識の推移を辿る。この三つの手法である。①の荒地派詩人たちの戦争体験では、鮎川信夫は陸軍に入営、北村太郎・田村隆一は海軍に入団し、木原孝一・黒田三郎は軍属として海外に派遣されるなどの直接的な戦争体験を有する。一方、中桐雅夫・三好豊一郎・吉本隆明は戦地での経験を持たない。これら、それぞれに異なる戦争体験を分析して山下氏は詩を解説している。②の詩人の生涯では、生い立ちや、戦時中の経験、また戦後の活動などを詳細に辿り、彼らが戦後実生活において戦争体験と如何に向き合ったかを論じている。③の言語の分析では、詩的表現のメタファーを①、②の分析と照らして解説している。

荒地派の詩或いは詩人らについて論じたものは、本論に枚挙・引用されているように極めて多く存在する。しかしながら、本論考のように荒地派の主要詩人たちを包括的に網羅して論じたものはこれまで存在しなかった。その意味での本論考は戦後詩の研究において大きな意義を有すると考えられる。

本論考は八人の荒地派同人それぞれに一章を割り、八章によって構成される。第一章 「言葉の白装束-鮎川信夫論」では鮎川の幼児から抱えていた心の「空白」が、戦地において親友・森川義信を失った体験とどのように絡み合い、鮎川の詩に刻まれているかが詳細に分析されている。第二章 「死せるものたちの瞳-北村太郎論」では、「自然」と対峙する北村の精神の軌跡が辿られる。沈黙する自然に対する恐怖が克服される過程を見事に論じている。第三章 「光と慟哭-木原孝一論」では技師として硫黄島に配属され、また戦争中最愛の弟を亡くしている木原は、終生死の影を纏った詩を書き続けた。論者は木原の壮絶な体験を、横光利一や伊東静雄の敗戦体験と比較することで、木原の心の傷の深さを明らかにしている。第四章 「神でもなく獣でもなく、人でもなく-黒田三郎論」では、戦争と戦後の間で引き割かれつつ、戦争にも戦後にも帰属できないエネルギーを描き続けた詩人として黒田を評している。第五章 「帝国の秋-田村隆一論」は、田村の空洞化した戦争体験と、海軍所属の軍人ではあったが、直接的戦闘体験を有しない田村にとって、戦争を超克することは一層困難であったこと、また田村の前期詩集と後期詩集の変容について、田村の精神を蝕む本質的な空白の存在によって読み解いており、その空白が荒地派詩人たちに通底する特徴であると論じている。第六章 「十三月の詩-中桐雅夫論」では、「荒地」の最初の仕掛け人であった中桐雅夫を論じている。中桐は徴兵を免れ直接的な戦闘体験を持たなかったが、中桐の詩は戦後の現在をではなく戦争における「死」と向き合い続けようとしたものだと論じて、「死者と出会ったその位置から動こうとしなかった」と論者は評する。第七章 「壁の中の人-三好豊一郎論」では、生と死に引き割かれた三好の自我意識を縫い合わせる自然の意義について検証している。最終章第八章 「透明な嵐のなかで-吉本隆明論」では、戦時体制下の価値観とともに育った吉本にとって、戦後とは「余生」に過ぎなかったと山下氏は述べる。残余の空無な時間の中で、吉本は死んだ「私」と語らうことで、破滅的経験から「美」を紡ぎ出したと論じている。第八章吉本隆明論は、単独で 170 頁を超える論考であり、荒地論の集大成として論じられている。

山下氏の論考はすでに述べたような方法論に従って、八人の荒地同人詩人の全詩を通覧し、解説するという長大な試みの成果である。山下氏はこの論考を進めながら、基礎資料として荒地派関連の文芸史年表の作成や、木原孝一の遺稿「無名戦士（硫黄島）」を編集して『血のいろの降る雪 木原孝一

アンソロジー』(未知谷 刊)を刊行するなど、実証的な研究を積み重ねて、本論考に結びつけている。そうした、実証的な方法を基礎に、詩の解説という本質的に客観性を保ち難い領域に敢えて挑んだとすることができる。この荒地論全編は、自身も詩集を上梓している論者の、現代詩の再生という大きな目的と結びついてゆく。山下氏は現代詩の詩人たちにとって自明の事項ではなくなった「自我」と「主体」の問題を、荒地の解説によって俎上に上げようとしている。論文の題名は「よみがえる荒地」となっているが、これは荒地派の詩人たちの(戦争)体験を自我・主体の問題として論じ、現代詩再生の原点に、荒地派の詩人たちの自我・主体との格闘を据えようとする意図が込められている。論者の激しい詩への情熱は、時に緻密な基礎的研究という基盤を揺るがして、詩的言語の深部をえぐり出そうとする。論考に散見される情熱の横溢は、ともすれば学位請求論文の形式を崩しかねない。しかし、詩の解説という難事に挑む方法が、これ以上のバランスで試みられることは不可能ではないのかと、評者は逆に自問せざるをえない。山下氏の情熱がこの途方もなく大きな壁に向き合い、洞穴を穿とうと槌を振るわねば、一寸の事実の解明も不可能であろう。ただ一点、再考を要すると思われる点を挙げるとすれば、論者がまだ非常に若く、戦時を生き抜き老いを重ねた詩人たちの人生を、所々余りにも観念的に捉えすぎているのではないかという疑念である。一例を挙げれば、北村太郎が妻子を海に亡くした後に書いた詩「終わりのない始まり」を解釈して、論者は『夏の強い光』(妻子と過ごした時間)が失せ、『冷たい闇』(一人きりの『生』)に落ちてゆく詩人—しかし北村にとって、『夏』とは何より敗戦の日のことではなかったか? 私たちが気づくのは、妻子を喪失する体験が、敗戦体験を上塗りするかのように北村におとずれた、ということである。」と述べる。しかし、ここで妻子の死んだ夏と、終戦の夏を重ねるといふようなことは、妻子の死という現実的経験の重大さを感じ取る感覚の希薄さを思わせる。論者は全編を通じて自我における空洞を論じているが、その空洞の観念性を論者は後にもう一度問い直さねばならないだろう。とは言え、現在荒地派を山下氏の論考以上に緻密にして、尚且つ総合的に論じたものは他にない。今後戦後詩の出発点である荒地派研究は、山下洪文氏の本論考の上に築かれねばならないと言える。

よって本論文は博士(芸術学)の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成31年2月4日